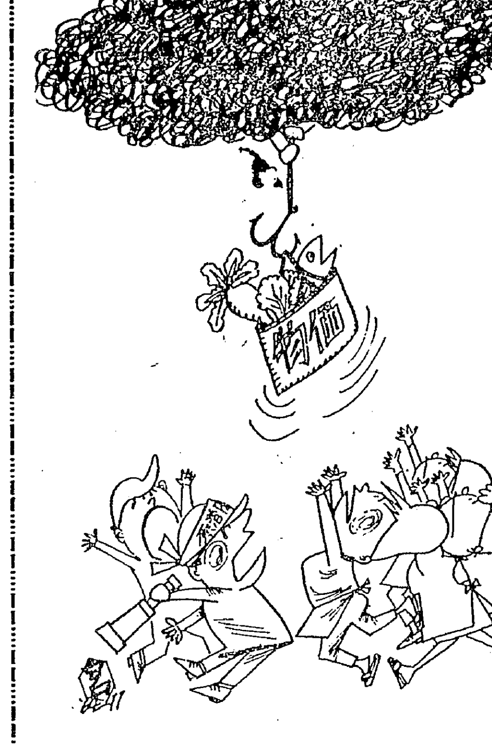
物価はなぜあがるか
反対斗争をもり上げよう



「腹背の敵」　宮下　森画

消費者物価は「経済のことは、俺にまかせてくれ」といった池田内閣成立後、昭和三五年から急騰し、その影響をもっとも大きくうけたのは低所得者層である。この大衆の怒りと不満の声の中で打出された政府公約の「公共料金値上げ抑制策」も来年から解禁になり政府はふたたび、消費者米価や医療費、国鉄運賃、郵便料金をはじめとして、公共料金の値上げをもくろんでいる。

それにともなって、私鉄運賃や水道料金、電力料金などの値上げが具体化している。こうして物価問題は、直接私たちの生活に大きく影響をおよぼしている。このような物価問題の本質を、どうとらえるべきか、真剣にとり組む必要がある。

私たちは「いちじるしい生産力の向上」とか「世の中がうまいぐあいに成長」とかいう、甘い言葉でささやいた池田さんの高度成長政策こそ、物価倍増の真犯人だと指摘するのです。そのカラクリを明らかにすると、

昭和三〇年から三五年までの経済指標についてみますと、この五年間に国民総生産は一・七倍にふえました。個人消費は一・五倍、政府支出は一・六八倍、輸出は一・六五倍と、いずれも相当な伸び率をしめしましたが、それでも総生産の伸びにはおよびませんでした。

ところが民間設備投資だけは、実に三・八六倍というおどろくほどの倍率をみせたのです。これは十年間で倍増どころか、わずかに三年間で二・五倍にもなる勢いのわけで、総生産の伸びのうち、きわめて大きな部分が設備投資の伸びによって吸収されていることがわかります。

こうした傾向は、さらに昭和三六、三七年の大型予算や所得倍増計画という独占資本を強化する国の政策となって、今日なお高い蓄積のテンポをゆるめようとしていません。

このように巨大な設備投資は、ますます投資を誘発し、生産財の需要を急速にひろげ、高い物価水準をつくり、高い利潤を確保するこのことが高成長すなわち高物価のからくりとなって、独占資本のみが肥え太っています。

生産力が高まっても「物価は下らない」

そのカラクリを支えているのが独占資本による独占価格なのです。一般的には、企業が自由競争段階にあると生産性の上昇はコストを低下させ、価格を下落させるものです。物価は生産性の上昇に応じて下がり、機械化や近代化の比較的困難な中小企業やサービス部門にも安い原材料を提供しますから全体として物価を安定させることができるのです。

ところが独占資本主義段階においては、生産性の上昇分を特別利潤として独占資本が独り占めしてしまい、中小企業や農民、一般消費者には高物価をおしつけているのが今日の日本経済の実体です。この傾向にさらに輪をかけているのが、無数のカルテル(企業協定)やトラスト(企業連合)で、大資本が高い利益を上げることができるように、独占資本が国の経済を自分たちの手でおさえているからなのです。

そして現在、好況のときも不況のときもどんな景気のもとにおいても、公然とカルテルが結成できる協定価格が結べる体制が政府の手によって保障されている実体を見逃してはならない。

公共料金値上げ

物価高をもたらしている原因のもう一つは、公共料金の値上げでその設備投資を大衆の負担でやろうとしています。高度成長政策は巨大な設備投資をした企業がなんの障害もなく活動できるように、その経済基盤を強化することにあります。

道路十カ年計画、国鉄の新五カ年計画、電信電話の通算十五カ年計画、電力設備の増強などの公共事業がそれであって、その設備投資は公共料金の値上げによって国民大衆が負担させられているのです。

料金値上げは「設備を改善してサービスを向上するために」をうたい文句としていますが、そのサービスが誰のためにおこなわれるかは、工場用の電力料金が一般家庭用の電灯料金の三分の一たらずしか当らないこと、国鉄の運賃が貨物輸送には原価を割った赤字サービスをして旅客の高運賃の黒字でカバーする政策など、どの例をとっても私たちのためでないことは判ります。

公共企業はその種類のいかんを問わず、本質的には収益を目的としない、公共のために奉仕するのが当然です。そのために必要なら政府が財政的な措置をとるべきです。しかし今日その公共性にかわって、企業性と経済性が強調されているのが特徴です。

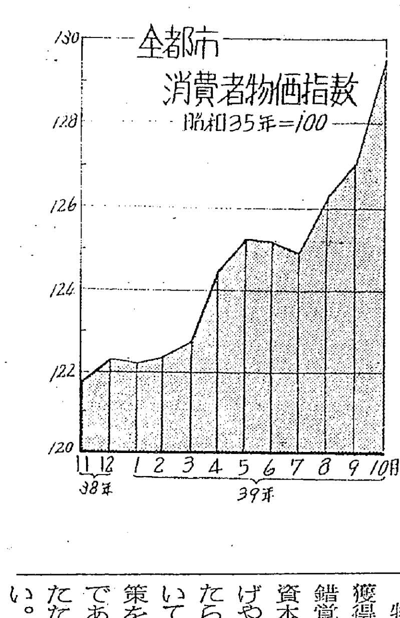
それは公共企業が一般財政から切りはなされて、独立採算性がしいられ、それは合理化をよび、そのしわよせは仂く者の労仂条件の低下、利用者に対するサービスの手をぬき、さらには公共料金の値上げとなるのです。

物価値上げ反対闘争

物価はどんどん上り、貧しい者ほど困っている。政府は知らぬ顔で、責任が政府にあるとはいわない。しかし物価値上げ反対闘争はもり上がらない。

物価が上がるのは、独占資本と政府が一体となって、高度成長のためのインフレ政策の結果によるものです。これは合理化と同じく独占資本の収奪政策なのです。私たちは直接生活をおびやかす、合理化と表裏一体である物価値上げ反対闘争に、組織労仂者が中心となって、行動によって阻止することが必要です。

物価値上げ反対闘争が賃上げの獲得で、当面のがれられるような錯覚からさめて、このような独占資本の、合理化による賃金引き下げや労仂強化によってもおおあきたらず、生産点以外の流通面においてまでも搾取を強化している政策を正しく見抜き、その根本原因である高度成長政策をくいとめるたたかいが組まれなければならない。



〈時のことば〉

労働者と農民の分断
〝逆ザヤ〟解消論

一六・二%(普通米、特選米)という史上最高の消費者米価値上げ案が決まった。これにより消費者米価より生産者米価(政府買入れ価格)の方が高い(このため食糧管理特別会計の赤字は千九百五億円に達している)という、いわいる〝逆ザヤ〟現象は解消する。

しかし農民に生産費を保障し(生産者米価の値上げ)消費者の生活を守る(消費者米価の据え置き)〝二重価格制〟に食糧管理制度、本来の建て前であり、赤字は当然。

政府が今回米価のスライド制(生産者米価に合わせて自動的に消費者米価を上げる)を取り入れる方向を打ち出したことは、労仂者(消費者)と農民の分裂をあおるねらいをもっている。(KNA)

労災補償適用の闘いの勝利
白血病死した藤井さん

昨年、住友電工核燃料研究員、藤井光興さんは、独占資本の核開発の犠牲となって、放射線障害、白血病で若い生命を奪われました。それに対して住電側は、おろか五万五千円の退職金で暗から暗にほうむり去ろうとしていました。このため住友電工内の労仂者有志を中心に〝白血病死した藤井君問題対策会〟を結成し、藤井さんへの労災補償を適用する斗いを住電側のさまざまな妨害をけって開始し五百余日に及ぶ全国的な規模の斗いにまで拡大していきました。

その結果、去る九月一九日労仂省発表によって、業務に起因する電離放射線の被ばくが誘因の一つとなって白血病が発生し、それが原因となって死亡したものとして処理することが妥当と判断し「本件は労仂基準法施行規則第三五条第四号に該当する疾病が原因となって死亡したものと認められるので、業務上として取扱われたい」と会社側の不当を認めさせることができました。

この問題は単に藤井さん個人の問題でなく、①労仂者の基本的権利、人権、生存権擁護の斗い。②独占の軍事的核開発に反対する斗い、の二つを柱にして総評をはじめ全国的に訴えたこの斗いは合理化強行のもとに、民主的な権利を奪われ、自らの生命をもおびやかされている現在の労仂者階級にとって、仂く者の生命と健康を守る斗いはきわめて重要な基本的な斗いであると共に、その勝利は単に放射線関係労仂者のみならず、現在全国各地で地道に斗われている数多くの労災・職業病に対する問題、殊に三池のCO中毒患者の特別立法化の斗いはもちろん、興国人絹八代支部の二硫化炭素中毒問題、日本触煤におけるフタロニトリル中毒の問題など多くの斗いに有利な条件となり、大きな励ましになります。

宮浦支部囲碁大会

宮浦支部では今まであった囲碁サークルを改革して、新しく会費制度に切り替えるため、各職場より代表者を選出し、準備会をもってクラブ会則などを審議し、新発足することになった。

三九年度囲碁クラブ総会を兼ねて第一回囲碁大会を、四三名の会員で一一月二二日、宮浦支部大会議室で行ない。会費月三〇円などを決め囲碁の趣味を通じて現状の斗いをさらに認識し、組合員相互の親睦をはかる意志を統一した。

【役員】
会長＝境隆雄、副会長＝江口成生、会計＝安達一男、監査＝境孜、他代表者若干名

第一回大会成績

【Aパート】
一等　堺　隆雄　(初段)
二等　境　孜　(一級)
三等　江口　成生　(初段)

【Bパート】
一等　甲斐田智司　(四級)
二等　藤島　実　(四級)
三等　村上　静雄　(五級)

【Cパート】
一等　新開　政俊　(六級)
二等　徳永　福満　(六級)
三等　松丸　緑　(六級)

【Dパート】
一等　谷口　茂　(八級)
二等　松藤　嗣治　(九級)
三等　松本　国治　(九級)

災害に遭われた方に

災害に、あわれた方々に用立て下さい。と次のような便りと共にカンパが三川支部の相川さんへ届けられた。

×　×

一一月九日を迎えるにつけても何一つ御役に立つことができないで心苦しい思いでおりました。

親しい友人からの依頼もありましたので、僅かですが三、〇〇〇円ほどを災害に遭われた方々のために用立てていただくようお届けします。折にふれて思い出し、現地の皆様には及ばないながらも、口惜しさと悲しさと、そして怒りをかみしめている私たちの気持をいくらかでもくんでいただけたら何よりです。

今年は中学三年の担任なので、仕事に追われて忙がしく、とても伺えそうにもありません。今日放送されたNHKの「ある三池被災者の一年」をみながら、しきりに新港の方々のことを思い出しております。年末の賞与が出たら、行けない分を、また何かの形で役立たせたいと考えておりますが、今日はとりあえずこれだけで失礼させていただきます。

亡くなられた方々の御冥福と、療養中の方々の御回復と、元気な方々の御健康を心から祈ります。寒くなる一方ですからくれぐれも御大事になさって下さいませ。

一九六四・一一・二三
川崎市刈宿一五七公団　一六ー二〇四
中村礼子
横浜市中区長者町アサヒビル
正田化粧品店内
正田庄次郎
相川様

〝日曜日の朝〟
宮浦・高椋竜生

日曜日
出勤の
妻―
おかげで
おちおち寝てもおれない
それというのに
あかつきを　ふかぶかと
眠っている　子どもたち
しばらくは
私と
妻とだけの　世界
「………」
「………」
時計のはりをきざむように
ガツガツ飯を腹の中に流しこむ
と息つぐ間なく
「いってきます―」
「ご安全に……」
あとは
菊匂うもとのしずけさにかえる
日曜日の朝―
(一九六四・一一・一六)

主婦会十二年 (11)
炭婦協結成準備 ①
五島頼子

やがて家族会の改選も終り、小鳩・暁をかけての支部長には、当時三川人事勤務で暁町居住の世話方であるOさんの奥さんが決ったという報告を聞きました。私はそれ以前炭労大会より帰って間もなく、小鳩町の地域分会婦人部長として班長会議を開きました。

度々書きましたように、当時は家族会の幹事兼地域分会婦人部班長でもあったために、地域婦人部班長会議は即家族会の幹事会にも通用したものです。

そこで私は伊東大会のもようを報告するとともに「今後私たちが少しでも生活を向上させ、家庭における婦人の地位を高めようとするならば、現在の会社につながる家族会の行き方では、私たちの要求は通らない。ここで炭鉱の主婦独自の組織を作って、全国的な組織の中に加入することが必要だと思います。

そのことがお父さんたちの組織している労仂組合を強めることになるし、労仂組合を強めない限り私たちの賃金も上がらないし、生活も安定しないのではないでしょうか」こんなふうに話をしている私自身が、何もかも解っていたとはいえませんが、とにかく一〇円出しの駄菓子をつまみながら、こんなふうに話し出しました。

緑ガ丘はこの当時から引揚者が多く、外地から引揚げてきて、やむなく炭鉱に入った人も多かったようです。物資の少い終戦後に、「丸炭さんなら娘をヤロカ」とまではいかなくても、米、ミソ、燃料の配給のよさや、例え五軒長屋にしても、やがては社宅にはいれるということは、たしかに有難いことだったに違いありませんでした。そこにまた、労仂者に餌を与えて仂かせる石炭資本や政府の意図が、根強く動いていたのです。

主人が万田鉱に入坑し始めたころ、よく言っておりました。「今自分たちのしている仕事は、満州で日本人が使っていた苦力(クリー)のしていた仕事だもんな」この短い言葉の中には、労仂条件や賃金、保安などすべての面に対する激しい不満が、声にならない声として胸の中によどんでいたことは事実です。これは引揚者はもちろん、内地に住みついている人でも、喜んで炭鉱で仂いている人はいないということです。

ことに主婦の人たちの中には、このころから活動家としてのめばえがあり、卒先して炭婦協結成への推進力になって下さった方も多いのです。私が話していく炭婦協のあり方と、現在自分たちが加入している家族会とは、どこが違っているのであろうか。

「お父さんたちに少しでも余計に炭を掘らせて、賃金はなるだけ少く支払い、自分たちの利益を上げようと考えている会社と、当り前に仂いて人なみの暮しができるようにと、最低生活から起ち上がろうとしている私たちとは、どこまで行っても平行線で、一致点はない」「ところが今の家族会というのは、知らぬ間に夫たちとは離れてしまって、会社と一しょに向う側の線に立たされているのではないか」

「お父さんたちが賃上げのための手段としてストをするときに、ストはいやだと組合に文句をいった時期もある。一円でも賃上げをしたくない会社のスト反対は当然のことだけれど、使われている側の私たちまでが会社のお先棒をかつぐのは、おかしいのではないか自分で自分の首をしめることになる」こんな意見が、つぎつぎに出てきました。

(次号へつづく)

発見
もっと勉強したい

今日は私の給料日、家を出るとき子どもが「うれしか、お母さんの給料日ね、早く帰ってきてね」と、いつものように闘争本部のところまで走ってきて手を振る。私も「火に気をつけてね、急いで帰ってくるよ」と、後振り向き、手を振りながら叫ぶと、子どもは頭をゴクンとうなずく。

紅葉する朝の空気を胸一ぱい吸いながら、ペタルも軽く初霜の上を自転車を走らせる。あちこちの家の軒下から、ちらほらとつるし柿が行儀よくならんでいるのが見える。

中小企業の小さい何の規約もない工場で、今日も一日ただもくもくと八時から五時まで、経営者の見守る中で仕事しなくてはならない。外に勤めている主婦のほとんどが、同じことでしょう。

多島炭婦協会長の挨拶にありますように、内職はあくまで家庭の問題としてかたづけることができない、社会的影響がある問題です。安い給料で仂く主婦の内職は辛いことが多い。でも内職だから賃金も安くてよい、労仂条件も低くてよいということはない。

私の家では給料日には主人にビール一本、子どもにサイダー一本づつを奮発することにしています。日ごろ酒を飲まない主人も、夕べの膳にてコップ一ぱいでまっ赤になる顔、喜び合ってはしゃいでいる子ども、私にとっては最大のサービスのつもりです。

たったこれだけの私たちのささやかな幸せも、資本家のきびしい合理化攻撃の中で、生命と権利をうばわれようとしています。主人の生命を守る保安の問題や、毎日の苦しい生活の中で主婦の立場として、子どもの母親として、現在の主婦会の在り方として、これでよいのか。自分たちの幸せのために、もっと真剣にならなければならないのではないか、と反省すれば、まだまだ勉強不足。

いろいろの集会、組合情宣には、ぜひ全員が出席したいものと思います。

(本所支部・一主婦)

〝目尾大集会〟

合理化反対・生活と権利を守る〝目尾大集会〟は三千名をこす大動員のもと十一月二十三日、目尾グランドにおいて開かれた。三池労組からも灰原書記長以下六十名が参加した。

目尾労組には現在、三池の第三次合理化以上の悪ドイ合理化攻撃がかけられている。その内容は三十九項目にもおよぶものであり、この中には、とくに活動家や、若年労仂者が含まれており、どの項目とて労仂者として絶対に認めることのできないものであり、目尾労組はこの合理化提案が今年の六月二十五日に行われるや、ただちに組合員、主婦会が一団となり長期抵抗の構えを確立して合理化粉砕の斗いに立ちあがった。

会社は組合のするどい追求にも会社の都合が悪ければ組合の云うことなんか聞く必要はないとか、労仂者の首を切ることは会社の勝手だ、などとうそぶき、十月十七日に二十六名に指名解雇通知を行い組合の組織動揺をねらってきたが、解雇通知状は一括返上し逆に組合組織は強化された。

秋の深まりとともに、その団結と統一を深めていった目尾労組は三十六名の指名解雇拒否者を中心に元気に斗いを進めながら、明るい展望をもって会社の矛盾の拡大をはかっている。

目尾大集会を契機にさらに全労仂者の統一と団結は広がるであろう。われわれも目尾の兄弟たちに共斗のスクラムとガンバローのこぶしを送くろう。

目尾炭鉱労仂組合
鞍手郡小竹町新多

連載小説
音
―みいけ大変災のなかから―
加藤説夫
(7)

心のなかの、本能的なものが、見るなーと呟いた。が、向井は確かめずにはいられなかった。仰向けに倒れているその顔は、半年ほど前、山野炭坑から転住してきた、隣の西脇正彦にちがいなかった。

西脇はおとなしいが、しっかりした感じの炭鉱マンで、山野から転住してきたために、自動的に第二組合に入れられたが、社宅での交際は第二組合員の家族とは殆んどなく、第一組合である向井の家族との交際が主のようであった。

西脇の妻のゆう子は、向井の老母から、不なれな土地に住む心もとなさをかばってもらうかわりに母をうしなった向井の子どもたちの母代りに、何かと面倒をみているようであった。――とくに、中学同級の稔彦と朝野は、両家の間で公認の親友であった。

向井は、他のものはどうであれ西脇だけはこの地獄から救いださねば――と、すぐ思った。向井は西脇の名をよんでみたが、意識はなかった。しゃがんで、手を肩にまわして助けおこそうとしたが、自分でもおかしいほど、腕にも足にも力がこもらず、腰がたたなかった。事情を知った中原が、左にまわって、二人で支え起そうとしたが、だめであった。

向井は、力なく坑底にのびている西脇のかたわらに、しばらく気抜けしたように坐りこんだ。そして、ぼんやりした頭のなかで、ふと西脇の妻のゆう子の白い顔を思いだした。

転住して二、三日たったある日西脇たちは夫婦して、青葉町の第一組合地域分会長をしている向井の家をたずねた。はじめは向井の方がすこしこだわったが、西脇は第一、第二ということに、何の偏見ももっていない風であった。

決議機関が会社側に買収されて三池争議に十分協力し得なかったことや、閉山の経偉など、おちついた口調で話す西脇の傍で、妻君のゆう子は、三人の子どもたちの明るい睦ましさを、微笑をたたえてながめていた。

三十五、六だろうか、炭鉱の主婦には不似合な、すこし〝きゃしゃ〟で清潔な感じのするゆう子に母親のない三人の子どもは、すぐなついた。主婦がわりのおばあちゃんにも、ゆう子の印象はいいようであった。向井には「大島つむぎ」を上品に着こなした、そのときのゆう子の姿態が、心に残っていた。

夢遊病者のようにふらふらとよろめきながら、向井は暗い坑道をそうろうと歩いた。足の感覚がなくなっていた。(このままではあぶない)と、本能的に思った。そして残りすくない力をふりしぼるようにして排気坑に倒れこみ、意識をうしなった。

5

ラジオ・テレビなどの報道関係は、事故の内容が十分つかめずに困っていた。夕方には被災者の数を二十名前後と報じていたのが、時間がたって、坑内のもようがすこしづつ明らかになるにつれて、被害者数は急上昇し、午後十時ごろには、四百名を超える死亡者を確認、関係者を呆然とさせた。

夕方から再び三川鉱にでかけていった朝野のおばあちゃんや、稔彦の母たちは、なかなか帰ってこなかった。母たちが出かけると、すぐ稔彦も朝野たちと一緒に、朝野のうちのこたつに入り、ずっとテレビをみていた。テレビの臨時ニュースで、それまでに判明した死亡者名を発表したが、そのなかには向井昭二、西脇正彦の名はなかった。

稔彦たちは、父の名前をみつけた瞬間のおそろしさを思って、ニュースをみるのがいやで仕方がなかったが、だからといって、見のがしては大変だと思い、懸命に神経を集中し、ニュースが終ったときは、くたくたに疲れていた。

家の外では、地域分会集会所のマイクや、社宅事務所のマイクが無事に昇坑した人々の名前や、遺体となって収容された人たちの名前を、無神経な太い声でがなっていた。そして、社宅の方々の坂路には、夜がふけても、ひっきりなしに登り下りする、自動車の音があわただしくつづいた。

朝野も稔彦も、精神の内部から外部から責めさいなまれて、神経がひどく疲れ、どうしていいか判らなくなっていた。自分たちがどんなに心配しても、それは父たちの生死とは何のかかわりもない――と判ってはいても、自分たちの今後のながい人生に、決定的な影響を与えるにちがいない。父たちの生死が判る一瞬を、平静で待てるはずはなかった。

(さしえ・村上敏美)